

第二章 阿女都千、詞

第一節 阿女都千、詞の出典

阿女都千の名の見
えたる古書類

阿女都千の名の初めて見えたるは、宇都穂物語阿婆にして、次は順集、次は、口遊、次は相摸集なり。北邊隨筆には、加茂保憲女集にもありといへども、類從本には見當らず、恐くは、相摸集の誤なるべし。是等の後は絶えて知るものなかりけるが、北邊隨筆に見えたりしより、また世に知られて、伴信友の比古婆衣に、安米都知誦文考といふがあるに至れり。今その古來物に見えたるさまを、こゝに抜きいでんに、先づ宇都穂阿婆なるは

上あかきしきしにかきて、うの花につけたるは、かむな。はじめには、をとこでもあらず、をんな手にもあらず、あめつち。そのつぎにをとこで、云々

次は順集なり。編者云、下に擧ぐる歌ども、各首、同字數にせんが爲めに、原書の漢字を假名に、假名を漢字にて記せるもの少からず。

あめつちの歌 四十八首

本、藤原のありたゞの朝臣藤六がかへしなり。かれはかみの

順集あめつちの歌
四十八首

かぎりにもそのもじをすゑたり。これはしもにもすゑ、ときを
もわかちてよめる。

春

あ。ら。さ。じ。と。う。ち。か。へ。す。ら。ん。を。山。田。の。苗。代。水。に。ぬ。れ。て。作。る。あ。
め。も。は。る。に。雪。ま。も。青。く。成。に。け。り。今。日。こ。そ。の。へ。に。若。葉。摘。て。め。
つ。く。ば。山。さ。け。る。櫻。の。勻。ひ。を。ば。い。り。て。を。ら。ね。ど。外。な。が。ら。み。つ。
千。く。さ。に。も。ほ。こ。ろ。ぶ。花。の。勻。ひ。か。な。い。づ。ら。青。柳。ぬ。ひ。し。糸。す。ち。
ほ。の。く。と。明。石。の。濱。を。み。わ。た。せ。ば。春。の。な。み。と。も。い。づ。る。船。の。ほ。
し。づ。く。さ。へ。梅。の。花。笠。し。る。よ。か。な。雨。に。ぬ。れ。じ。と。君。や。か。く。し。
そ。ら。さ。む。み。結。び。し。氷。う。ち。と。け。て。い。ま。や。行。ら。ん。春。の。た。の。み。ぞ。
ら。に。も。枯。菊。も。枯。に。し。秋。の。野。の。も。え。に。け。る。か。な。さ。ほ。の。山。づ。ら。

夏

や。ま。も。野。も。夏。草。繁。く。な。り。に。け。り。な。ど。か。未。し。き。の。へ。の。苺。か。や。
ま。つ。人。も。見。え。ね。ば。夏。も。白。雪。や。猶。ふ。り。し。げ。る。こ。し。の。し。ら。や。ま。
か。た。戀。も。身。を。や。き。つ。と。も。夏。虫。の。あ。は。れ。わ。び。し。き。物。を。思。ふ。か。

は。つか。にも。思。ひ。か。け。て。は。ゆ。ふ。櫛。賀。茂。の。河。波。た。ち。よ。ら。じ。と。は。
み。を。つ。め。ば。物。思。ふ。ら。し。郭。公。な。き。の。み。ま。ど。ふ。さ。み。だ。れ。の。や。み。
ね。を。ふ。か。み。ま。だ。現。れ。ぬ。あ。や。め。草。人。を。戀。路。に。え。こ。そ。は。な。れ。ぬ。
た。れ。に。よ。り。祈。る。せ。々。に。も。有。な。く。に。淺。く。い。ひ。な。す。大。麻。の。は。た。
に。は。見。れ。ば。や。を。蓼。お。い。て。荒。に。け。り。辛。く。し。て。だ。に。君。が。と。は。ぬ。に。

秋

く。れ。竹。の。よ。さ。む。に。今。は。な。り。ぬ。と。や。か。り。そ。め。ぶ。し。に。衣。か。た。し。く。
も。が。み。河。い。な。ぶ。ね。の。み。は。通。は。ず。て。お。り。昇。り。猶。騒。く。あ。し。が。も。
き。の。ふ。こ。そ。往。て。見。ぬ。程。い。つ。の。ま。に。映。ひ。ぬ。ら。ん。の。へ。の。秋。は。ぎ。
り。う。だ。う。も。名。の。み。也。け。り。秋。の。野。の。千。草。の。花。の。香。に。は。劣。れ。り。
む。す。び。置。し。白。露。も。み。る。も。の。な。ら。ば。夜。光。る。て。ふ。玉。も。な。に。せ。ん。
ろ。も。か。ち。も。船。も。か。よ。は。ぬ。天。の。川。七。夕。わ。た。る。ほ。ど。や。い。く。ひ。ろ。
こ。の。は。の。み。ふ。り。し。く。秋。は。道。を。な。み。渡。り。を。わ。ぶ。る。山。川。の。そ。こ。
け。さ。み。れ。ば。う。つ。ろ。ひ。に。け。り。女。郎。花。我。に。任。せ。て。秋。は。よ。や。ゆ。け。

冬

ひをさむみ氷もとけぬ池水やうへはつれなくふかき我こひ
とへといひし人は有やと雪分けて尋ぞきつる三輪の山もと
いづみともいさや白浪立ぬれて下なる草にかけらくものい
ぬること衣をかへす冬の上に夢にだにやは君が見えこぬ
うち渡し待つ足代木のいとひをの絶てよらぬはなぞや心う
へび弓のはれるにもあらで散花は雪かと人にいる人にとへ
すみがまのもえこそわたれ冬寒み獨思のよるはいもねず
ゑごひする君がはじ鷹霜がれの野にな放ちそ早く手にすゑ
思

ゆふさればいとゞ詫しき大井川柵火なれやきえかへりもゆ
わすれずも思ほゆる哉朝なくねし黒髪のねくたれのたわ
さゝ蟹の糸だにやすくねぬ頃は夢にも君にあひみぬがうさ
るり草の葉におく霜の玉をさへものおもふ君は泪とぞみる
おもひとも戀とも瀬々にみそぎすと人形なでゝ祓へてはおゝ
ふく風につけても人を思ふにはあまつ空にも有やとぞ思ふ

行 行

(注)

せをふちに五月雨がたの成行けばすをさへ海に思こそなせ
 よし野川その岩浪いはでのみくるしや人を立居こふるよ
 えもいはで戀のみまさる心かないつとや岩におふる松のえ
 のこりなくおつる泪は露けきをいつらむすびし草村のしの
 えもせかで泪の川のはてくやしひて戀しき山はつくばえ
 をぐら山覺つかなくもあひみぬるなく鹿ばかり戀しき物を
 なきたむる泪は袖にみつ潮の干間にだにもあひみてしがな
 れうしにもあらぬ我こそ逢ふ事をもしの前の燃焦れぬれ
 ろても戀伏てもこふるかひもなく影淺ましくみえぬ山のゐ
 てる月ももるゝ板間のあはぬよはぬれこそわたれかへす衣手
 かくの如く歌の頭と末とに同じ文字を置きて詠みたるを其の
 頭若くは末の文字を連ねて見れば共に、

あめ つち ほし そら やま かは みね たに くも
 きり むろ こけ ひと いぬ うへ すゑ ゆわ さる
 おふせよ えのえを なれゐて

口遊に阿女都千の名の見えたるさま

相摸集あめつち十六首

の四十八字となる。次に順朝臣の弟子源爲憲の口遊チチノアソビ天祿五年の作の太爲爾歌に附言して、

今案、世俗誦阿女都千保之會、里女之訛說也。此誦爲勝。チチノアソビ

といへり。以て天祿時代に於いて、後代の伊呂波の如く、阿女都千の詞の行はれしを證すべし。次は相摸集に、

ある所に庚申のよ天地をかみしもによむとてよませし十六首

春

あさみどり春めづらしく一鹽に花の色ますくれなるのあめつきもせぬ子日の千世を君が爲まつ引つれんはるの山みちほかよりはのどけき宿の庭櫻かぜのこゝろも空によくらし。その方と行ふしらるゝ春ならば關すゑてまし春日野のはら

夏

やど近き卯の花かけは波なれや思ひやらるゝ雪のしらはまかたらはゞ惜みなはてそ時鳥きゝながらだにあかぬ聲をば

みしま江の玉江の眞孤夏がりにしげく往きかふ遠近のふね
 たきつせに澱む時なく襖せんみぎは涼しきけふの なでしこ

冬

なこりに。うら

むしのねも秋すぎぬれば草村にこりある露の霜むすふころ
 この葉もる時雨ばかりの古里は軒の板間もあらし と思ふを
 えこそねゝ冬の夜深く寢覺してさえまさる哉袖の こそふけ。うらこほりの
 えた寒み積れる雪のきえせぬは冬とみるかな花のときはを
 とあり其の上下におきたる二字を合せ見れば、

あめ	つち	ほし	そら	やま	かは	みね	たに	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

となりて、順集と合せ見れば、○印の言字に當る歌を闕きたり。但し其の闕きたるは、歌の闕失せるにはあらで、初めよりかゝりしことは、四季四首つゝに分ち詠めるにて知られたり。而もかく字を省きたりし理由は明かならず。さりながら、之によりて、阿女都

千詞には、一定せる次第あるを明かにすることを得べきなり。唯こゝに注意すべきは、順の歌は、エノエチの句を詠むに、二つのエを同じ得の意に詠みて、初めのエは「得モ言ハデ」後のエも「得モ堰カデ」としたれど、相摸集なるは「得ヨソ寝ネ」と「枝寒み」と、一はア行のエ、一はヤ行のエなる詞に當てたり。

以上にて、我が國、天祿前後には、一定の假名を學ぶが爲に、同音なき阿女都千詞といふものゝ存在せしことを知るべきなり。

第一節 阿女都千詞に對する先哲の所見

阿女都千詞につきて、先哲の説を擧ぐれば、北邊隨筆に、

亡父また云、なには津あさかやまの後は、あめつちほしそらといふことを手ならふ人のはじめとしけるにや、文字の數四十八なり、順が集、また加茂保憲女集等にあめつちの歌は見えたり、かのふた歌は、おなじもじかきなりてもあり、もれたるもじもあれば、天地の歌はその後にぞいできたるらんとおぼし。下略

古言衣延辨加賀前田家の重臣、奥村榮實の文政十二年作。の古事記書紀は、更にもいはず、およ

そ、延喜天曆の頃より、さきつかたの書どもには、皆此阿行夜行の
わかちありて、聊も誤る事なかりしを」とある、細注に、

是によりておもふには、天地の哥は、中ばより末、何のことゝも
聞取がたけれど、衣の江とあるは、必ず榎の枝なるべくおぼゆ。
然るときは、榎は阿行、枝は夜行也、

と見ゆ。是初めて、古來未解のエノエは、此の人に到りて、快く解せ
られたり。こはアヤ二行のエの分別を解せられざる間は、到底解
せらるべきことならねばなり。

天朝墨談 越中の五十嵐萬好といふ人の著、五十嵐氏は、和縁
の書家にて富士谷御杖につきて、國學せし人なり。に、あめつちの詞を
擧げて後に、

此歌末のかた、何とも聞とりがたし。順集の歌の列、あやまりた
るにや、さて是は四十八字ありてえ二つあり、其の歌は

えもいはで戀のみ増る心かないつとや岩におふる松がえ。
えもせかで泪の川のはてくやしひて戀しき山はつくばえ。
かく二首とも、えの音によまれたれど、是は誤りにて、えと延な

るべし。上古かな遣ひに衣延の別ありて、たゞしかりしこと或
貴人の考あり。衣延辨といふ御著述あり。それは、もはら高野大師のいろ
は歌を、手習のはじめにする事とはなりぬ。是は四十七字に延
なし。延は、衣の誤ならん。

比古、婆衣四、伴信友の隨筆。安米都知誦文考の條に、順集の事、何くれといひ
て、あめつちの詞を擧げたる次に、

然るに、戀部えの位に、えもいはで云々、おふる松が枝と有りて、
次にのこりなく云々、その次に又えもせかぬ云々、山はつくば
えとありて、四十七首の外に、えもじの歌一首あまれり。相模集
なるこのあめつちをよめる歌にも、然る次第に見えたるが上
に、註此の順集の歌の題の下に四十八首ともあれば、全文にえ
もじ二つあるに合へり。さるは、いかなることか、さらに心得が
たし。しひてたすけていはゞ、もしくは、あめつちほしそらとい
ふことに、二音づゝとのへて四音を一句として唱へんには、
四十七音にては、一音足らざれば、其の句をとゝのへむとして、

阿女都知に對する
榊原芳野の説

え音を一つ加へて、唱へなれたるにもやあらむ。

文藝類纂の習字沿革に、初めに古今序、源氏などの手習のことをいへる文を引きて、次に宇津保のあめつちとあるところ、又順集のあめつちを擧げて後、

以上天地星空山川峯谷雲霧室苔人犬上末の義なるべけれど、ゆわさる以下解すべからず。且えの一つ多きは延の音かとおもはるれど、其の義解しがたく、且順は衣の意にてよみたれば、何の爲とは解し難し。但しこれに據りて我が國イェとエの二音別あるが如くいひなせども、實は然らざること下の假字音説の下にいへるが如し。略下

と見えたり。

右の如く、阿女都千詞に對してエノエの榎の枝の義なるをば解し得たる奥村氏の如きはあれど、他は皆エワサル以下は解し難しと爲さざるはなし。而して編者の考ふるところは、次節に述べ可し。

第三節 阿女都千詞の成立

阿女都千詞の成立は、當時通用の假名を、一音につき、最も普通
用ゐらるゝものを取り集めて同音無き、四十八字を得、これだに
記憶したらんには、口舌上の言辭は、自在に記し得らるべからし
めたるなり。而して尙、之を記憶するに容易ならしめんが爲めに、
誰も知れる天文地理動植等の同音無き名稱、又は動詞、手爾乎波
のたぐひをつゞり合せたるなり。然るに、同音の文字なくして、意
義なき言の無きやうにせしものなれば、半過ぐるまでは、穩かに
見ゆれど、それより下は、困苦せしさまにて、勢ひ、對偶の快らざる
ものあるに至れるなり。さるを、先哲中、末のところ何とも解し難
き由にいはれたれど、伊呂波歌などの如く、全體貫通の意味ある
ものと一様に見ては解し難けれど、一語一語はなれたるものと
見ば、何等の障なく聞ゆるなり。そは、ユワとあるは硫黃のことに
て、和名抄に、

阿女都千のユワは
硫黃なり

硫黃 和名由乃阿和俗云由王。

と見えたる由王なり。此の由王をユワと呼ぶべきことは、この詞にユワとあるにても知らるべく、また、編者が郷國越後の下民は、今も附木の硫黄などをユワといふことなり。サルは猿なること異論はあるまじく、其の次なるオフセヨは、古語には、命令の意にも生育の意にも用ゐる例あれば、上の猿に、縁みてならんには、兒を生ふし立つるとしても可なるべし。又其の次なるエノエといふことの、榎之枝の義なることは、新撰字鏡に、

杓衣乃木

榎衣乃木

木衣の木

杓比古江

杓比古江

の如く、榎のエには、衣を用ゐ、枝のエには、江を用ゐ、萬葉にも

山葉左佐良榎壯士 佐散良衣壯士 麻都我延乃 多氏流都

我能奇、毛等母延毛

など、榎と衣とを、音訓互ひに通はし、枝の意の假名に、必ず、延等の文字を用ゐて、常に衣榎等の假名と分別せるにて、天曆以上には、榎のエは、ア行のエとして、衣の音假名を用ゐ、枝のエは、江の訓假名に非ずば、延等の音假名を用ゐて、ア行ヤ行のエを確然區別し

たることは、極めて明らかなればなり。又次なるナレキテは、慣居而の意なることは既に動かすべからず。右の數語を、斯く解したる上にて、サル以下を引連ねて考ふれば、或は猿よ、兒をよく育てよ、榎の枝などの上に、慣れ居てなどの如く、猿に縁あるが如く、ほのめかしたる者と爲さば爲すべきなり。さらば、強ちに、ユワ、サル以下解すべからずと言ふまでにも非るべし。畢竟諸先哲未嘗てアヤ二行のエの分別ありしを知らざりしより、同音の有るまじき、此の詞にして、エ文字の二つ有るを痛く怪しめるが上に、ユワの如き不解の語さへあるより、能くも考へず、爾か謂はれたるならん。但し前段に末の數句、猿に縁ありなどいひたれど、熟思へば、サル以下は、さても有るべけれど、ユワの一言、其の意更に上下に連らざるは、如何にとの難は免かるまじ。されば、此の詞は、初めより、意義の貫通を以て主要のことと爲さで、唯初の程は、同じ文字なき語を求めて、得るがまゝ併列したれど、自然に對句の如くなりたるが、ユワ、サル、以下に至りて、次第に究し、遂ひに、かくの如く

なれるにて、伊呂波、太爲爾の如く、強ひて、意を屬けんが爲めに、幼童などには、耳遠き語を用ゐたりしよりは、遙かに優れりといふべし。今一言づゝの次第を逐ひて、其の意義を注すること左の如し。

ア	メ	天	ツ	チ	地	ホ	シ	星	ソ	ラ	空	ヤ	マ	山	カ	ハ	川
ミ	ネ	峯	タ	ニ	谷	ク	モ	雲	キ	リ	霧	ム	ロ	室	コ	ケ	舌
ウ	ヘ	上	ス	エ	末	ユ	ワ	麻	サ	ル	猿	オ	フ	セ	ヨ	生育	
エ	ノ	エ	ヲ	根ノ 枝ヲ	ナ	レ	キ	テ	居 テ								

かく、書き連ねて見れば、現今の小學に於ける單語篇、讀書入門の類にして、全く上代に於いて、幼童に常用の假名を教ふる用に供したるものなること、疑ひあるべからず、されば前にも擧げたる如く、宇都穂には、はじめには、をとこでにもあらず、をんな手にもあらず、あめつちとは見えけるなり。

第四節 阿女都千詞の行はれし時代

阿女都千詞の行はれし時代はといふに、先づ初めて、此の名の見

えたるは、宇都保物語なれば、其の書の年代を定めざる可らず。そは、黒川春村の墨水遺稿に、此の物語のことの、他書に見えたる限を擧げたる中に、左の二項あるにて、源氏物語の前、伊勢物語の後なること確かなり。

源氏物語繪合卷云、まづ物語のいできはじめのおやなるたけとりの翁、うつぼのとしかげをあはせてあらそふ_{下略}。搥尻卷廿云、空穂物語に、源順朝臣の作とかや、彼物語に、あかなくにまだきも月のなんどのたまひてといへば、伊勢物語の後の作なること明らけし云々。

順の作れるなどはいか々なれど、大略この頃のものなるべし、然るときは、殆ど口遊と同時のものにして、之を相摸集に見えたるをも考へ合はするときは、村上天皇の天曆より、一條天皇の正曆前後の末つ方には、旁く世に行はれたることは、確かなりとす。然るに、此の頃は、既にアヤ二行のエの混用時代と、交錯の時期なれば、此の詞に既に明確に分別せられたる上は、此の詞は、必ず遠く

阿女都千の遠く天
略以上に行はれた
る證據

天曆以上のものたるは、復争ふ可らず。是に於いて、尙特に、口遊の阿女都千保之會と記せる文字について考ふるに、先づこゝに阿女都千保之會と記して、保之會良の良字の見えざるは、如何なる故にか。或は書寫せるものゝ脱せるならんとも見ゆれど、さにはあらざるべし。何とならば、此の頃の習字本も、後代のいろはの手本と同じく、一行七字に書き習ひしかば、人皆此の詞を指して阿女都千といふよりも、阿女都千保之會と呼びしものならん。故に其のまゝ、かく記しゝなるべし。然らずば、此處には、阿女都千などと名のみ記して有るべきなり。是より推して、阿女都千保之會の文字も、昔より書き來れる此の詞の、最初の一行を示せるものと見て可なるべし。而して其の文字の、口遊の作者の隨意に記せるものに非ることは、口遊の中に記せる歌どもは、概ね、其の書に擧げられたる大爲爾歌の文字を用ゐたるが、例へば、阿は總べて安を用ゐ、都は徒、千は多くは知を用ゐて、古來の例と異なる一癖ある眞假名のみ多く用ゐたること、下に擧げたる大爲爾歌を見て

知るべし、然るに、作者自ら記せる、此の阿女都千保之會とかける眞假名は、天曆以上の古經卷等の傍訓の片假名の字原に、見慣れたる文字なれば、若し相ひ比較して、互ひに一致するところ多かるに於いては、アヤ二行エ音を分別せし時代に於いて、エ音分用の假名遣に適用せられし阿女都千詞の字形を略、推測することを得べし。今試みに、寛平八年に、訓點を施したる石山寺所藏、蘇悉地羯羅經略疏の片假名の字原たる眞假名を、阿女都千の次第に排列して見るに、

阿女 川千 保之 曾良 也萬 加八 見三禰 太多二

久毛 木幾利 牟呂 已介 比止 伊奴 宇部 寸須惠

由和 左流 於不世與 衣乃江乎 奈禮井天

の如くにして、口遊の阿女都千保之會と比較するに、川と都との異同のみにて、殆ど一致せりといふべし。されば、初の四言にして、かくの如くなるときは、推して全詞に及ぼすも、亦大異同なきを知るべし、尙、天安以上の訓點の片假名字原も、亦皆大同小異なる

こと、拙著假名史料の假名字體沿革一覽を見ても知らるゝところにして、乃ち此の時代に於いては、恐くは、右の如き眞假名にて成れる一種の手習の詞ありて、一般に用ゐられたるは、殆ど疑を容れず。既に之を以て然りとせば、其の詞は、此の阿女都千なりしならん。而も之を推して奈良朝に達し得べきや否については、暫く措き、唯多く片假名を以て、訓點を施せる時代以來、僧俗に拘らず、之を用ゐること、後代に於ける伊呂波歌の如くなりけんことは、其の詞に分別せられたるアヤ二行のエを混用せる順集、口遊それより降りて相摸集時代までも、阿女都千といへば、誰知らぬものなきさまに見ゆるにても、如何に一般にも、久しくも、行はれたりしかを想ふべし。

抑も眞假名の初めは、書により、時と人により、文字一定せざりしかど、萬葉の末つ方家持集の頃のもの、又は正倉院御物中の書者を異にせる二通の尺牘の眞假名の略、一定せるところあるより推せば、此の時代、既に、阿女都千の行はれしやも亦知るべから

古代なにはづあさ
かやまを手習ひし
所以

男手女手の別

ず、果して然らんには、阿女都千詞は、文字こそ萬葉時代に異なる所もあれ、奈良朝末より、天曆以上に最も盛に行はれ、天祿永觀以後、伊呂波歌の行はるゝまで世に知られたるものなるが如し。然るに、北邊隨筆になには津あさかやまのゝちは、あめつちほしそらといふことを、手習ふ人のはじめとしけるにやといへれど、こは、古今集の序になにはづあさかやまの二歌を手習のはじめにせしことをいへるより、然か考へたるなるべし。されど、この手習は、幼童の初めて文字を學び初むるをいへるにはあらで、自己が詠める歌など、物に書きつくる事を習ふにて、源氏に、まだなにはづをだに、はかばかしうつゞけはべらざめればとある、つゞけといふ詞に注意せば、自ら覺らるべく、殊に右の歌は、二首合せても、四十八字の假名には、二十字も足らず。且其の缺けたる中には、重要なる假名多きにて、其の然ることを知るべきなり。されば、宇都保にも、先づあめつちとし、つきになにはづ等に代ふべき男手、次に女手、と次第して、手本を書きたるなり。但し、宇都保に、をとこで

阿女都千の行體な
りし推測

でももなく、をんなでもなく、あめつちとあるは、男手は、女子が常に用ゐる略草の連綿躰、即ち草假名、女手に對して、男子の用ゐる正楷及び楷行體の文字を指していへるなり、而して阿女都千の字體を以て、男手にも女手にもあらずとするときは、正楷や楷行體にもあらず、略草の連綿體にもあらざる其の中間の行體なりしと推定する外あるべからず、かく推定したる上に回顧すれば、天曆以上の傍訓に用ゐたる片假名中、行體の字原より抜き取りしと覺しきがいと多きも、亦之が傍證と爲すに足るべきなり。以上の如く、觀來るときは、此の阿女都千詞は、中古以來、殆ど隱晦して世に知られざりしと雖ども、こは元來我が國、上古よりこの方、用ゐ來りし眞假名の字體、一定せず、一音數十字の多きに至るが上に、極めて繁畫なるもの少からず、故に、民間教育を妨ぐること、最も甚しきを致せり、然るに、奈良朝末期頃に於いて、作者は知られざれど、此の詞の行はるゝに至りてより、平安朝初期、佛經授讀の事盛になるに隨ひ、自然、片假名の發生進歩は、勿論、女童に適

阿女都千の功績

する草假名の發達を促すべき基礎となれるものと謂ふべきなり。されば、後代民間教育に大功ある伊呂波歌等の父祖を尋ね來らば、此の詞を措きて他に求むべからず。是に於てか、我が國文教育上暫くも、此の大功績者を没すべきに、あらざるなり。